

有森 信二

予備校入学の面談で、第一志望校を京都大学文学部だと
言った。校長は僕の高校三年間の成績表を斜交いに眺め、
旺文社模試や県内模試ほかの資料をめくっていたが、「そ
れで」と脂ぎった鼻を蠢かせ、老眼鏡の奥の目を光らせ
ながら、ソファアの背もたれに反り返った。

僕は彦岐の島を朝一番の船で発ち、佐世保の街に着いた
ばかりだった。佐世保に住む君子叔母が、僕が自宅浪人を
始めたというのを聞き付け、島を出ないかと誘ってくれ
たのだった。

「京都大学というところが、本当に分かつとるのかね」
校長の表情の中に、田舎者のくせにという蔑みの色が
ありありと見えた。

「高校の成績はともかくとして、模試の成績が今一つ、い
や、今三つだな」

「これから頑張ります」

「五月の連休も過ぎた。予備校では、もう中間地点に掛か
っている。今は詰めめの段階だと言ってもいい。それにまた、
なぜ文学部を志望する」

やはり、この問いがきた。父や母、高校の元担任からも

同じ問い掛けをされ続けてきた。

母や、母方の祖母から、農家の長男には学問など必要な
ということをも、もの心ついた頃から執拗に言われてきた。

農家の長男を高校や大学に出すと、跡の継ぎ手がいなく
なる。そうなると、やがて田畑は荒れ、先祖の供養さえも
疎かになる。子供の言うままに学問をさせたばかりに、廃
屋になった家がいくらかもあるではないか、と詰られる。

漁師の家では、もつとはつきりしている。子供が中学に
入る前から船に乗せ、一本釣りを仕込み、綱を打たせる。
だから彼らは、中学の成績がどんなに良くても、高校に進
むことはないといつてよかった。

「勉強は家でするもんじゃない」

「勉強は学校で習うだけでよか。家では仕事。それで勉強
が出来るのが、一番偉いとぞ」

「仕事もようせんもんが、何の勉強の必要があるうか」

かつて、尋常小学校を秀才で通してきたというのが自慢
の、六十歳を過ぎても読み書きや算盤の手が落ちない祖母
から、顔を会わせる度にそう言われた。

「土を耕し、作物を育てる。それに勝るもんがあるもんか。
戦時中は、食べることのためには、位も学問も金も何の役
にも立たんかった。それが大学とくる。おまけに文学部ち
ゆう。何になる。そんなもん、遊びじゃないか」

母の言葉も、祖母のそれに輪をかけた激しいものだった。祖母はめつたに現れないが、母は、毎晩僕をつかまえ、膝の前に座らせ、「土地さえあれば、食べることには困らん。都会の給料取りは、米も野菜も全部買わんといかんのだよ。今でも、町方から大勢が米や野菜の買い出しにこらすやろ」と、食べ物を買うということがいかにも卑しく恥ずべきことだと言わんばかりに、ことある毎に言い募った。

おまけに、「正敏君は朝の五時から田ごしらえをし、学校から戻ったらすぐに田植えの加勢だよ。感心だねえ。少しは見習わにやいけんだろ」と僕と同級の近所の正敏のことをことあるごとに引き合いに出し、褒めた。

僕には、遊んだという記憶が殆どない。

小学校から帰ると、生まれたばかりの妹を背中にくわえ付けられ、田畑の手伝いをし、夕方には炊事用の水瓶と風呂釜一杯に水を汲み、十時には寝るとい日々だった。十時を過ぎて電気を点けていけば、母の「始末せんといかんじゃないか」の一言で消灯しなければならなかった。

登校前には、六畳の板敷きを拭き、庭を掃いた。掃除の内容が悪いと、早朝一番の田畑の仕事を終え、食事の支度のために戻ってきた母から、即やり直しを命じられた。

下校すると、「学校の下の田にくるよう」とのメモがある。学校の下の田に行くと、待ち構えていた母から、早

速妹の由美を背中にゆわえ付けられ、その重みで首を突き出し、目を白黒させ、よろけながら田から二百メートルばかり上ったところにある小学校の校庭まで歩いた。

校庭では、同級生の末広たちがソフトボールをやっている。遊んでいるのは、商売の家か勤め人の家の子ばかりだ。僕は、校庭の片隅に立ち、ボールの行方を目で追う。

「健治も入れ」

ボールを追いかけてきた末広が、息を弾ませたまま声を掛けてきた。背中の由美の足を振り、小さく首を横に振る。「三点負けとる。何とかならんか」

僕の馬鹿力を知っている末広が、長打を一発頼むと顎をしやくってきた。もう一度、由美の足を抓る。

「ほんまに付き合いの悪い奴め。よう頼まんわ」

末広は捨て台詞を残し、走り去った。

中学になると、男たちは一人前の労働力に勘定される。大人に混じって、田を起こし、水を張り、苗を植える。炎天の下での草取り、消毒、水の汲み上げ、稲刈り、脱穀と続く。畑では、葉煙草の植え付け、芽摘み、葉の採り入れ、乾燥、選別と息つく暇もない。

農作業の合間を縫って学校に行かせてもらう、というのが適切な表現だ。

授業中の机に座っていると、眠い。作業の疲れが溜まっ

ているので、朦朧とした頭で話を聞いている。X+Yが頭
のてっぺんから剥がれ、照りつける窓の外の日を蒸し焼き
になる。SCHOOLもHISTORYも、念仏みたいに
天井に抜けて飛んで行く。

中体連の練習でクラブ活動が長引き、日が落ちて帰ると、
母の機嫌が悪い。

「いつまで遊んどったんか」

激しい形相での一言が飛んでくる。その目を背中に受け、
黙って天秤棒を担ぎ、水汲みに出る。蝮の潜む百メートル
ほどの草道の坂をへっぴり腰で歩き、飲み水と風呂釜の水
を汲まねばならない。五往復は必要だ。

遅い夕食が終わり、子供部屋になっている二階の物置に
上がると、母がついてくる。

母は、四番目の明を産んでから心臓の具合がよくないら
しい。一旦発作が起きると、胸を押さえ、息が途絶えるの
ではないかというほどに喘ぎ、脂汗を流す。

「兄弟が四人おる。長男の健治が農家を継ぎ、みんなをま
とめてくれないと、困るんだ。兄弟の仲というのは、他人
の始まりというほど難しいもんだ。母ちゃんがこのような
具合だから、いっぴりなことが起きないとも限らない。中
学を出たら家業を継がなきゃならない。勉強が好きなのは
分かるけど、長男の務めなんだ。分かったらうね」

くる日もくる日も、同じ話を聞かされる。

「話は分からないじゃないけど、一度だけでいいから、自
分の可能性を試してもいいよ、とどうして言ってくれない
の。長男だって同じ子供だよ」

僕は、傍で話を聞いて知らん顔をしている弟の亘の横顔
をそれとなく見やりながら、口答えをする。

母は一時間近くも部屋にいて、最後は決まって不機嫌な
顔で階段を下りていく。

父の方は、五時のサイレンの鳴る前に作業を終え、公民
館長会だか、葉煙草耕作組合長会だとかに出掛け、毎晩夜
中に十人近くを引き連れて戻り、酒盛りをする。その焼酎
の買い出しに、何度も走らされる。

クラスの半分以上が高校に進学すると言っている。僕の
場合は、母がいつも言うとおりに中学を出て農業をする、
ということになっている。母も、母の兄である真一伯父も、
成績は良かったのに、親の許可がもらえず、口惜しい思い
をしたという。

その同じ口惜しい思いをしろ、と言っているらしい。し
かし、僕たちの教わる授業では、親は子供の成長のために
身を挺してでも、その願いを叶えさせてやろうとする、と
いう筋書きになっているのだ。

「親って、子供の将来について、希望を持たせようと努め
るのが本当の姿じゃないの」

「本日も偽物もない。あんたは役目として家を継がなければならぬだ。だったら、中学で十分だろう」

「例え農業に就くにしても、勉強の必要がないなんて思わないよ。農業だって、これからは頭を使うやり方が必要になると思うんだ。クラスの半分以上が高校に行くんだよ」

実際、家庭訪問などで、担任から「素質のすばらしい子が三人います。近年になくレベルが高いですね。健治君はその筆頭で、十年後、二十年後が今から楽しみですよ」と言われ、母も悪い気はしないらしく笑顔で聞いているものの、担任が帰ると、「あれは余所の家の話だからね」と付け加えるのを忘れなかった。

進路は早めに決めるように、とクラスでは三年の春頃から指導がなされていた。

「健治は当然進学だよな」

「健治が行かんで、誰が行くんじゃ」

末広たちから、何度言われたことか知れない。その度に、口ごもってしまわなければならない自分に苛立った。

僕は、中学校で頭抜けた成績をとれば、ひよつとして、高校に行かしてくれと言えるんじゃないかと考えた。それも、勉強をせず一番になる方法をあみ出そうとした。

実際、島の中学校のレベルはそれほどではないので、授業を漏らさずに聞いていれば結果は出る筈だ。

農作業で疲れた体を真っ直ぐに立て、授業を聞くことにした。この時間の他には、二度とチャンスはないのだと言いついて聞かせた。聞いていると、つまらない授業だと思っていたものが、結構面白いものであるのに気付いたりした。特に、俳句や短歌の凝縮された表現が気に入って、ちつとも面白くなさそうに訳を説明する教師の言葉尻を掴まえ、自分の訳との違いを戦わせたりした。

ともかく、一番の成績で卒業し、学校側からの強い口添えも得て、高校に入学したのだった。高校は島内に二校あり、普通高校と商業高校であるので、普通高校に入った。

母は「あんたの希望どおり高校に入れてやったのだから、今度は話を聞くんだ。高校を出ると、役場や農協に勤めることも出来る。そうなってくると、土地を荒らすこともせずに済む」と切り出してきた。

僕自身、最初高校卒でも仕方ないと思わなくてもなかったが、高校に入学してみると、クラスの上位の連中の多くが大学進学を目指しているのを知った。入学時の成績順に分けられた特別進学クラスに入ると、クラスは九州大学など、国立大学志望者が殆どを占めているのだった。

入学時の進路志望調査に、進学志望なしとするか、クラスの連中が志望する九州大学とするかで一週間ほど迷ったが、「先祖代々の祭りごとをしる」と言われるけれど、何基もある苦むした墓地の塚の下で、既に命絶えた彼らは今何

をし、何をどう思っているのだろう」などと常々考えてきたこともあり、これら以外には考えてみたいというものが思い付かないので、九州大学文学部哲学志望と書き、提出することに決めた。

ところが、哲学では京都大学の方に魅力ある分野がある」と知ったので、大学を変更し京都大学と書いた。

直後に行われた面談で、担任から将来の展望がきちんとあつての志望かと問われた。僕は簡単に家庭の状況を話し、これぐらいの気概がないと進学を認めてもらえないので、大きな目標を持ち、まず奨学金を得るといふ条件をつくり、周りを説得して行くのだと説明した。

担任は、なぜ文学部を選ぶのかと執拗に繰り返したが、僕の中にも確かなものがある訳ではなかった。

母はこれ以上進学は無理だ、仕送りなど出来ない」と二階に上がってきて、くどいほど言った。殆ど毎日といつていいほど頻繁に上がってきて、釘を刺す。

僕が島を離れたら、決して戻ってはこない。そうなららうどうなる。よく考えるんだ。何とかやりくりをして高校にまで通わせているというのに、恩を仇で返そうというのかい。第一、約束が違うじゃないか。

母は、感情が高ぶってくると、胸が苦しくなるといふ心臓病をかかえているので、途中で畳に突っ伏してしまふこ

とが度々である。

僕は、一度自分の可能性を試させてほしい、と答えるのが精一杯で、そう言った後でいつも、突っ伏した母のために村の診療所に走らねばならなかった。

「兄は、どれだけ師範に出たかったか」

母の兄であり僕にとつての伯父である真一は、祖母の血を受け、秀才で鳴らしたらしいが、上級校への進学は許されなかつた。長男であることと、生まれつきひ弱なためだつたという。担任の教師が祖母の元に、幾度となく進学を勧めにきたらしいが、祖母が首を縦に振らなかつた。

「農家を継ぐことと、先祖を祭ることのためには、学問は荷物になるばかりで、益にはならない」

養女として育てられた負けず嫌いの祖母は、養父母への過敏なまでの遠慮と、夫を早く失つた苦境もあつて、言葉を選ぶ間もなくそう言つたという。教師の職に就き、片手間に土を耕すという道は理想の形ではあるが、真一伯父には、どちらもがおざなりになってしまうというのだった。

しかし、実際は下に五人の子を抱える中、学費の工面が覚束なく、世間から贅沢だと思われるといふことと、養父母の前で甘えることを良しとしなかつたというのが本音だつたらしい。それに、真一伯父には肺結核の疑いがあると言われていたらしく、祖母にとつてはどう考えても手元から離す訳にはいかなかつたのだ。

母は、真一伯父が進学を断念させられ、風呂場の陰で涙を流していたとの話もした。

そんなことを知りながら、僕にも高校への進学をあきらめさせようとし、今度は大学進学の方だ。

「真一伯父と同じ口惜しい思いをさせたいという訳なんだ、僕にも」

母は意外そうに僕の顔をまじまじと見詰め、「そんな口惜しい思いをしたからこそ、今の兄がある。学校は出ていないけれど、町議として五年、地域の世話役として立派にやっているじゃないか」と、祖母の判断は決して間違っていないかったのだと言う。

「真一伯父なら、師範、大学と進めば、学者や、もしかしたら代議士だって夢ではなかったんじゃないかな。だったら、どれだけ多くの人の役に立つかわかん」

「そうかも知れないけど、決定的に違うのは島を捨てて、という前提があるかないかだよ」

「僕にも、同じ道を進めという訳だ」

「親は、やっぱりこの線だけは譲れない。本が好きだからといって、この忙しいときに読むなどという事は贅沢な遊びだし、そんな時間がどこにある。大学に行きたいと言つても、条件というものがあるだろう。第一、家業には何の繋がりもないし、一人を遊ばせるゆとりなんかある訳がない」

「大学で高いレベルのものを知る。多くの人に出会う。多くのことを経験する。世のために働く。このことが、僕には何故与えられないというの」

「それがどうしたのさ。とにかく下に三人弟妹がいるだろう。だから、健治がここにいなければ始まらないんだよ」

「そんなことのために、僕を生んだんだ」

母は苦々しく胸元を押さえ、僕は顔色を変えそつぽを向く。いつも、そんなふうに時間が経過した。

「じゃあ提案だけど、真一伯父のときと同じ師範。今だったら、教育学部というらしいけど」

三年の五月の末、母は父の意見を取り入れたという新しい提案をした。

僕の偏差値は九州大学を越え、ほぼ京都大学が見える位置にあった。

「つまり、教師として必ず島に帰ってくる。それが条件だ。もちろん、奨学金を得て、出来るだけ生活費は自分で準備して、ということになるけど」

僕は、教育学部ではなく文学部でも教職の資格が得られるということ、長い間宙ぶらりんのまま、定めることの出来なかった目標をようやく掲げることになった。

「文学部って遊びじゃないの。で、高校から帰ったら、一人前以上に手伝いをするという生活は変わらないんだよ」

僕にとって、ぎりぎりの時期に形だけは整った。ただし、目標設定が大きく遅れた分だけ、準備が足りなかった。とにかく遅れを取り戻さねばならないのだった。

目標は、全校で二人だけが目指す京都大学である。五十年の高校の歴史の中でも、数人しか突破していない筈だ。

僕は、遅れを取り戻すため、放課後二時間を図書館での自習時間に充て、帰宅してからは農作業の手伝いをし、夕食を終えた後、十時から二時までを英数の時間に充てた。

日のあるうちは田畑に出、風呂の水を汲み、日が落ちても父たちと同じ葉煙草の選別作業をこなすのだったから、十時からの英数の時間が十一時からになったり、十二時を過ぎることになったりした。

しかし、初めて自分の目標を持つことが出来たのである。嫌でも、気持が高ぶった。二年間の遅れは、必ず取り戻せる。絶対、取り戻さなければならぬと思った。

「何もせずに勉強が出来るのが一番ぞ」

祖母の言葉が、今では逆の拠り所だった。与えられた時間、内容をより深く詰め込む。これだ、と思った。

六月、七月と成績は伸びた。予想以上だった。ほぼ、合格ラインに達したと言っている。

僕は、英数の時間を三時まで延ばした。疲れはなかった。内容が、躍り込んできた。気持を張り詰めていた。気が合いが勝っていた。

突如の目眩と、崩れ落ちそうな気怠さを覚えたのは、八月の終りの暑さが殊の外厳しい週末だった。

午後の補習時間に、机に突っ伏したまま起き上がる事が出来なかった。五限目の数学の時間には、昨夜二時間掛けて解いた問題を指名され、模範解答を出し、得意だった「やっぱりなあ」と末広たちが言うのに、Vサインをして見せた。

それから、二時間と経っていない。

「熱いぞ。すげえ熱だ」

「顔が真っ赤じゃねえか。保健室、行くか」

僕は薄れていく意識の中で、「大丈夫だ。心配ない」と呟いていたのを覚えている。多分、みんなの声を振り切つて校門を出たのだだろう。肩にかけたバッグの重さに耐えながら、二百メートルばかり歩いた。

なぜ、外科医院を目指したのか分からない。めつたに患者が入っていると見えない外科医院が、校門傍にあった。僕は、医院の扉を押し開ける格好で入ったらしい。

「虫垂炎だな」

「熱は四十一度」

「血圧は二百十」

看護婦の小さな悲鳴が上がった。

「かなり急ぐな」

まだ三十代にしか見えない若い医師が、顎を捻った。
「暇はない。明日だな」

島外の病院に搬送している間はない、という意味だろう。即入院となり、翌日午後一番に手術ということになった。

二本の点滴を打ち、幾分気分が落ちついた。一度顔を見せた母も、農繁期で手が離せない状態であることと、虫垂炎の手術であるからということ、付き添いなしとなった。

医院ではめったに手術はしないものとみえ、医師と看護婦二人だけが僕を挟んで立った。下半身麻酔で行うと告げられ、背中に注射を受けた。手術が始まった。

最初、しっかりと麻酔が効いていた。ところが、一時間が経っても終わる心配がない。さらに一時間が経っても終わらない。やがて麻酔は切れ、生身に戻ってしまった。

「癒着だよ。まいったな」

「こいつは手強い。しかし、やるしかない」

医師の声に、ありありと動揺の色が見える。

痛いなどといったものではない。生身の体をメスが裂き、癒着しているらしい腸が剥がされる。腸が引き剥がされる度に息が詰まり、呼吸が出来ない。悶絶とはこういうことかと、脂汗を流し、朦朧とする頭の端で考えた。あまりの痛さに宙を驚掴みする思いで、動かない身を振り立ち上がるとうとする。

「ヴワツ」と呻くと、医師も癒着のことは予期せぬほどの

度合いであったとみえ、「まだ始めたばかりだ。我慢しろ」と言いながら、壁の時計を見上げ、顔中に吹き出した汗を看護婦に拭かせ、溜め息を付いた。

下半身麻酔で始まり、その麻酔の切れたときを含め、僕は全ての進行具合を感じていた。マスク越しの医師のあせりの表情、看護婦のあわただしい動きなど、場面によって変化していく彼らの様をつぶさに感じた。

「癒着がひど過ぎる。予想を越えている」

「どんなベテランでも音を上げるぞ」

「君も辛かるうが、こつちも大変なんだ」

「我慢比べだ」

「こうなったら、君と俺たちに運があるかどうか、だな」

「なんで、こんな具合になるまで放つてた。えらい迷惑だ」というもんだよ」

濡れ通った汗を滴らせ、医師の呟きは途切れることなく続く。二時間半、三時間と手術場の時計が時を刻んでいく。

麻酔が切れ、神経が剥き出しになり、まさに生身を切り刻まれる激痛に、僕は声を上げる力もなく、動物の唸りに似た音をたてていた。押し寄せて来る痛みの波に、体全体が棒状に硬直し、何百回も気持が千切れそうになるのを断崖の切り岸に立つ思いで、必死に耐えた。

「血圧、二百五十」

看護婦は、計器の数値を読み上げる度に悲鳴に近い声を

上げていたが、医師が「データはもういい」と制してから、彼女も腹を決めたらしかった。

僕の意識は、押し寄せてくるあまりの痛みのために飛んでしまったのか、ふいにゆらりと自分の体を離れ、手術室の天井のあたりまで彷徨い出、自分の腹部を医師と看護婦が覗き込んでいるところを、上から眺めているのだった。

試しに、玄関のあたりまで彷徨い出て、チャイムを鳴らして入ってきたのが子供であるのを眺めてもみた。ガーゼの付け替えか、消毒のためにきたのだろう。濃いピンクのスカートの似合う子だな、と思った。

医院の玄関傍の植え込みに、二匹の蛇が絡まり合っているのを見た。黒い縞模様の蛇だった。

医師が何か叫んだ。

「こら、しつかりしろ。眠るんじゃない。もうちよつとだ、あと十分の辛抱だ。あと十分だ。頑張れ」

医師の目が真剣になった。看護婦の動きに緊張が走った。計器の数値を息を止め、睨んでいる。

壁の時計は、四時間が経ったことを知らせていた。僕の意識は、時計の針のあたりにあって、医師が屈み込んで縫い針を操っているのをぼんやり見ている。

「クソッ、終わったぞ」

医師が叫んだ。看護婦が、素早く点滴の容器を替え、血の跡を拭き取った。

「終わりましたねえ」

「いやあ、まいったまいった」

医師は時計を見上げ、もうこんな時間なのかという驚きの表情を見せ、手術着を乱暴に脱ぎ捨てると、ドアを蹴たてて部屋を出た。

僕の意識は、そのあたりで再び僕自身のうちに戻ったらしく、しばらく忘れていた傷口の痛みを思い出した。今の痛みは、臓器を引っ張り、剥がされるときの裂き抉るといった痛みではなく、鈍く、重く疼く痛みに変わっていた。

「危機一髪だった。もう三十分遅かったら、破裂していただろう。とにかく、出来得る処置は全て施した」

一服し終えたのか、医師は手術台まで戻ってくると、ニコチンの濃い臭いを吐きながら言った。首や肩を左右に捻り、隈の出た目を閉じた。

外科医院を退院したのは手術の十日後だったが、傷口が塞がらなかつた。傷口から、血膿に混じって糸が出てくる。ガーゼ交換の度に、看護婦が眉を寄せた。

退院のとき、三十七度の熱が下がらないのに首を傾げていた医師であったが、「四時間の手術だった。四時間というのは、大病院での助手の時代以来だ。ともかく、ベストは尽くした」と言いながら、ガーゼ交換のため、しばらく通院するようにと言った。

「君は受験生なのか。肝心のときに、これじゃあついてないな。でも、あの状態で大病院に移すには時間がなかった。動かせなかったよ」

医師は、ベストだったとはさすがに言わなかった。週二回の付け替えに通いながら、僕は京都大学への距離が少しずつ遠のいていくのを感じた。

「気長にやった方がいい。とにかく、まず体を作らんことには大学もなからう」

ガーゼを外し、三十センチばかりの金属の処置棒を傷口に深く差し込み、引き抜くと、ドロリとした緑色の膿に混じって、輪になった縫い糸が何本も出てくる。

「やはり、もう一回だな。仕方がない」

処置棒に付いた膿の具合を見下ろしながら、医師は言う。

「もう一回、手術という訳ですか」

「それも早目に。腸に化膿が広がらないうちな」

医師も溜め息を付いた。

処置棒を受け取り、傷口の消毒をし、ガーゼの付け替えをする看護婦が、医師の顔を覗き、頬を膨らませる。

「君もめつたにない経験だよな。僕も、こんなことは初めてのケースだ」

僕とは二つ三つぐらいしか違わないと思われる看護婦は、ガーゼを絆創膏で止めながら、再手術ですかと言った。

「今年中がよからう。そうすれば、退院も年末までには大

丈夫だろう」

「今度も、また四時間掛かるんですか」

あの生身を裂かれる痛みが、腹部に蘇った。

「冗談じゃない、今度は麻酔の醒めないうちにやるよ。で、あのときみたいに親から抗議をされるのは困る。事前に、ちゃんと説明しなきゃな」

夏の入院のとき、僕の家族に連絡が付いたのは点滴を始めて五時間してからだったといい、母が駆け付けたのは日が落ちてからだった。

「なかなか連絡が取れないの。電話が出ないから、一番近いと思える商店に取りついでもらったの」

看護婦が、連絡を取ったという。

「あの日は私の誕生日で、先生が御馳走してくれると言っていたの。で、その予定はキャンセル」

看護婦は急患の僕のために、予定を変更して二日連続で夜勤に付いてくれたらしい。

母は薄暗くなって、野良着のまま駆け付け、僕の胸を叩きながら、金切り声をあげた。

「何でこういうことになるのさ。ただでさえ、家の者みんなが苦しいときに。やっぱり甘やかしたかねえ。高校に行かせてやれば、また受験なんて言い出す。だから言わんことじゃない」

母は僕の経過の悪いことを、知っている。入院の十日間のうちの二回、仕事が済んだ夜の時間に様子をみにきた。

退院してからも、一度ガーゼの付け替えについてきた。付け替えのときは、あまり真剣に看護婦の手元を見詰めるので、卒倒でもしてしまうのではないかと、反対に心配しなければならぬのだった。

母に、もう一回の手術のことを言わねばならない。多分十日間の入院で予期しない出費となつた筈だ。その後の三か月というもの、通院の費用が掛かる上、僕は家の手伝いは殆ど出来ていない。

いったい、いくら算段をしなければならぬのだろう。家計にどれだけ響くのだろう。考えただけで、気が重たい。僕自身も、大ショックだ。近付いてくる入試のためだろう、クラスに異様な緊張が走り、みんな口数も少ない。

初め、三か月近く病院通いをしている僕への遠慮かとも思ったが、そんなことではなさそうだ。クラス全体がよそよそしい。担任も、カレンダーの日数を数えながら、どこか半オクターブ高く乾いた声で気合いを入れている。

そんな中に、もう一度入院するという話など持ち込みたくなかつた。何とか曲がりなりのリズムを保ってきたのが、一挙に崩れて行く自分を見るのは耐え難いものだった。

二回目の手術をしたのは、晴れた空からときおり雪が舞

い落ちる日だった。商店街のスピーカーから、クリスマスソングが流れていた。

正月を前にして忙しい母や、弟妹たちの付き添いはなく、今回も一人で病院の玄関をくぐつた。これから、また冷え冷えとした手術台に乗ることより、クラスのみんなが進む列から一人離れなければならないということの方に、大きなわだかまりがあつた。

二回目の手術自体は、途中で麻酔が切れるということもなく済んだ。

結局、治癒したというお墨付きを得て僕が外科医院を退院したのは、一回目の手術から四か月近くが経つた、十二月の末で、三年の二期期が、既に終わつていた。

四か月近くの加療であつたが、復帰後も成績だけはかうじて以前からの位置を保つことが出来、卒業式には、総代として答辞を読んだのだが、自分が読み上げる内容と、足元から吹き上げてくる得体の知れない冷風とのギャップに、いたたまれず声を詰まらせてしまつた。

用意した内容は、広く世界に雄飛する気概を持ち、この学舎で得たものを土台にして、さらに深く学び、成熟させ、優れた識見ある人々と親しく交わるにより、積極的に友好の輪を広げ、多くの人々に貢献することを目指したい、というものだった。

「文学部で、哲学をやりたいんです」

「哲学だろうと、考古学だろうと、英文学だろうとかまわん。何になりたいか、だ」

校長は、僕の顔から半分目を背けながら言った。

「職業ですか。今は、思い付かないんです」

日頃からサラリーマンになることを嫌う母の言葉が、ちらりと頭を過ぎった。

「動機が弱いな。まあ、文学部だとすると、教員か、公務員か、マスコミ関係というところだろうな」

「とにかく、人間の根元について学びたくて」

「それが、どうして京都大学なんだ」

「哲学だったら、京都大学だと」

「分かったような、分からんような話だ。まあ、頭ごなしに説教するのは置いて、島の高校のレベルが当てにならないから、この成績だけでは何とも言えん」

校長は僕が高校に入学する前の年まで、偶然にも僕の出身校の校長をしていたというから、島の生徒がどのレベルにあるかを知っている。

「トップの生徒が、まれに東大、京大に入るのはあったが、十年に一度あるかどうかのレアなケースだ。君が、このレアの部類に入るのかどうかは分からんが、高校の成績だけで見れば、あなたが無謀なチャレンジだとも言い切れん、と言うことだけだな」

校長は、進路についてはそれ以上触れず、僕が相談をもちかけたアルバイトの話に移った。仕送りを出来るだけ少なく押さえるため、アルバイトの口がないかと前もって事務を通じて聞いていたのだった。

「授業終了後の、校舎と構内の清掃というやつがある。月に二千円だ」

僕は反射的に頷き、その場で机に額がつきそうになるほど頭を下げた。

校長がもう下がれという仕事をしたので、入校、入寮、アルバイトのことまでが、十五分足らずで決まった。

現役で受験したときのことは、思い出したくもない。京都大学とは遙かに隔たった大学に変え受験したのだが、受験に耐える体力が戻っていなかった。

ランクを二つも落としたものの、五教科の受験は辛かった。試験場に座っているだけで目眩がし、脱力感に見舞われた。なんとか粘らねばと精一杯努力したのだが、激しい吐き気と便意を催し、同じ時限に二度も席を立った。二度目にトイレから戻って来たときには、目の前が霞んでいた。不合格は、「サクラチル」の電報を待つまでもなかった。しばらく誰とも会わず、布団の中で過ごした。夜は眠れずに、昼間に眠って過ごす日が続いた。虫垂炎を発症したとき、高血圧と糖尿に異常が見られたのが、まだ数値が殆

ど改善されないまま残っていた。体に力が入らず、周りの景色が黄ばんで見えた。

「これじゃ、仕事にならんじゃないか」

母の言葉も沈んでいた。父は髭面を撫でながら、「百姓の子が、この歳でこんな年寄り臭い病気持ちというんじゃ何とも出来ん」と言うばかりだった。

佐世保に住む母の妹である君子叔母は、高校の保健の仕事をしており、僕の状態を聞き付けると、まず気を紛らせることが必要だろうし、体を慣らすために佐世保に寄越してみないか、という誘いをしてくれた。父も母も「このまま寝付いてしまわれるのはたまらないし、鬱陶しい。今のままで百姓を継がせるには、体がついていかんだろうし」ということで、叔母に預けてみることにしたのだという。

もつとも、家計にダメージを与えることであるので、僕もこの期に、出来る範囲のアルバイトをしながら予備校に行くことを希望し、何とか話が付いたのだった。

「また大学受験になるのかい。考えもしなかったことだよ。まずまず家とは離れることになる。アルバイトをしながら予備校に行くという気力の方はあるというのに」

母はしきりにそう零し、首を傾げていたが、目の前にだらしく横たわっている様を見続けることには耐えられない、という方に大きく気持が動いたのだと思われる。

五月のゴールデンウィークが開けたその日から、佐世保進学予備校生としての生活が始まった。

既に四月からの授業はスタートし、組分けも寮の部屋割も決まっていたが、組は国立文系コースに、寮の部屋は空き部屋のあるD棟ということになった。

まず背負ってきた小さな荷物を部屋に降ろすと、アルバイトの指導担当である事務長から呼ばれ、毎日の授業終了後、全教室の雑巾掛けと、箒による構内の清掃の要領について説明を受けた。教室は全部で九室あり、構内は五十段の階段を含め、教室棟や寮の周囲の全てが対象になり、これを現従事者二人とで行う、ということだった。

「毎日約二時間は必要だ。チリ一つ残してはいかん。三人いたうちの一人が、一か月と持たずに辞めたばかりで、ちやうど一週間の間が空いて、君が入ってきたという訳だ。これまで、毎年この仕事についた連中のうち、最後まで続けた者は必ず志望校に入ったな」

事務長は老眼鏡をかけた驚鼻を轟かしながら、予備校人としての蘊蓄をたれた。この労働に耐えさせずれば、合格間違いなしというジンクスが伝統として生きているという。今日からスタートだ。要は、最初からオーパーワークにならない程度に、徐々に慣らしていけばいい。勿論、仕事

なんだというのを忘れてはいかん」

肩をパンと叩き、事務室の奥に消えた。事務室には、女

性事務員が三人いて、予備校のカラーである草色のユニフォームを身に付けていた。

その中の佐藤という名札を付けた子が、入学手続き一切を扱ってくれた。高校を出たばかりかと思える頬が赤くつるりとした子で、授業で使うテキストなどを揃えてくれた。

国立文系コースの授業に出た。僕にとつては、その日の最終時限の国語が最初の授業だった。大教室に五百人以上の生徒たちがいて、痩せて小柄な講師が四書五経などという初めて聞く書物の話をしていった。ぶかぶかのワイシャツの袖を縫い上げ、竹の鞭を振り回しながら、教壇を跳ね歩いていった。ピンと端の上がった口髭が、大きな声を発する度に大きく揺れた。

生徒も負けずに、三国志だの易経だのという言葉を返し、大八髭先生の脳味噌に更なる刺激を与えているのだった。

島の高校では、三年の間、一度たりとも見たことのない伯仲した試合さながらの授業風景であった。

「違う。都会の連中は、やっぱり違う。ちゃんと勉強を積んできている」

当たり前前のごとを目の前にして、これまで自分がやってきたことの浅さ加減に、初めて気付いたのだった。僕の場合は「勉強は学校でするもの。それで出来るのが一番ぞ」と、言われ続けてきた。

島の他の連中も、多くは似たようなものだったろう。一家業の手伝い、二にも家業の手伝いという有様であったから、勉強は定期試験の時期の、それも家業の手伝いを終えてから、という具合だった。

「高校まで通わせとる。それだけでも有り難く思え」
親たちは、平日に子供が高校に通って行く姿を、苦々しげに見送った。

「せっかくの穫り入れ日和に、人手が足りんだろ。終わったら、すぐに戻ってくるんだ」

出掛けに何度そんな言葉を浴びせられたことか。僕たちは、体を小さくして登校した。だから、帰ると「至急、裏の田にくること」という書き付けを見て、真っ先に田圃に下りた。例え、定期試験の最中であろうとも。

もつとも僕の三年時は、八月以降は入院と通院で田畑に出る状態ではなく、授業にも集中出来なかったの、校長が言うとおりに、実力の方は二つも、三つも足りなかった。

下川、近藤、古田というのが、この予備校ではトップスリーであるという事は、すぐに知れた。

彼らの住む建物は寮とは異なり、本館の二階に個室が並んでおり、そこに入れるのは特待生という身分の者に限られていた。自分の認定は、予備校が行うのであるが、有名進学校出身で、県下の模試や旺文社模試などでの上位者で

占められていた。

彼らは当然のことであるが昨年難関レベルの大学を受験し、今回も前年同様の目標を定め、当然の位置に君臨していた。特待生は、授業料や生活費まで免除になる替わりに、きちんとした結果を出すことが義務付けられていた。

彼ら三人ともが東京大学を目指し、下川と古田が文系、近藤が理系であった。

彼らがいっただいどういうふうな地力を蓄えてきたのか知らないが、三人はいつも長閑に散歩をしたり、ジョッピングに出掛けたり、休みが続くときには泊まり掛けで山歩きに出向いたりしていた。飯を食うのものんびりしているし、談話室でいつまでも話し込んだりしていた。

理系の近藤でさえ、易経だのを持ち出し、大八髭先生をかなり問い詰めていた。彼らに通じて言えるのは、文系であると同系であるとかかわらず、英国数のどの科目にも通じ、ちゃんと中身を持っているということだった。英語であれば、英作文にも、和訳にも、会話にも通じていて、発音がベターであるかどうかさえ問わなければ、ここが米英であつても不自由はしないだろうと思われた。

談話室には英字新聞が置いてあり、それを手に取っているのは三人であり、記事を見て笑い転げたりしていた。

「基地の街だから、相手に不自由はしないんだよ」

下川が教えてくれた。友人として米兵と向き合うことは

ないが、街に出ると気軽に声を掛けるのだと言った。これは三人に同じことが言え、夕方の街で米兵の姿を見掛けると、自分から話し掛けるのだと言う。

「生きた英語の勉強さ。誰からも教わっちゃいない。知らないうちに、そうなったという訳さ」

結構そうやって、自分の英語を試してみる連中がいるらしい。米兵も、おおかたがフランクに応じてくれると言う。「勿論、彼らが法律や規則で罰されることのないだろう、他愛のない話をさ。それでも、結構気を使ってな」

授業終了後の掃除は、アルバイトの三人が一緒に行うことになっていった。

国立文系志望の清水と、国立理系志望の川本が、一か月の先輩だった。授業終了二十分後、教室棟横の用具置き場に三人が集まった。事務長が僕の紹介を兼ねて、作業のやり方の指導のために出て来てくれた。

事務長は、「本校が提供するものは、レベルの高い授業と生徒が利用するに十分清潔な施設であり、その後者を君たちに担ってもらおう。この二つの要素のいずれが欠けても、本校が立ち行かなくなる。であるから、気構えをしつかりもって誠意を尽くしてもらいたい。そうすることで、不思議なことだが、君たちにも大きな力がついてくるのだ」と、これまでの例を持ち出した。

「終了したら、日誌に必要な事項を記入し、所定のポストに投函する。毎日のチェックは行わないが、週に一回程度は抜き打ちで見回りをし、万一在校生から、意見箱に苦情が入ったら、罰則を課すということになっている」

事務長は、清水と川本にも念を押す恰好で、細かい指図をして説明を終えた。

僕は、清水と川本が極めて生真面目なタイプであることを、彼らが事務長の話を直立した恰好のままで聞いているのを見て感じていたが、川本の方は生真面目に超がつくぐらいの存在であるのを、すぐに知ることになった。

九つの教室は大教室が三室、中教室が六室という具合だった。フロアで言えば、三階建の各フロアに大教室一室と中教室二室があった。

川本は、必ず三階の大教室からスタートし、まず教壇の黒板を拭き、一列一列の机に丁寧に雑巾をかけ、ゴミを拾い、床にモップをかけ、という手順を崩さなかった。

川本が三階、清水が二階、ぼくが一階というふうに担当を分け、一時間半はゆうにかけて各フロアの掃除をした。

それが済むと、一階の用具置き場に雑巾やモップをもどし、今度は箒に替え、建物の周囲に箒の目を入れ、最後は五十分の急傾斜の回り階段を掃き降ろして終了した。

最初でもあったためか、時計は二時間半が経過したこと示していた。清水も川本も、ちょうど夕食時間の七時に

解散するという手筈にしているのだと言う。

聞いてみれば、清水も川本も金に困つてのことではなく、この校風にもなっている「環境の美化を揺るがせにしない」というアルバイトに自ら志願することで、合格をねらっているらしい。勿論、三人には月に二千円の手当が支払われ、僕の場合は部屋代をそれに当ててにしている。

単調な掃除ではあるが、毎日となると疲れてくる。受け持ちは三教室にしか過ぎないのだが、掃き、点検し、拭きあげるのだから、結構たいへんである。机のどのあたりに傷があり、どのあたりにどんな汚れがこびりついているかということなど、すぐに憶えてしまった。また、教壇から全体を眺めてみたら、たいていのところまでは見渡せるものだということを知ったのも、貴重な発見だった。

こうやって通常の序列にしのぎを削る場にあつて、毎日二時間半の時間をとられるということは痛くないことはないが、夕食までに区切りが付くということでは、僕にとつては有り難かった。

なにしろ京都大学である。校長からもらった資料では、校内で最低ベストテンに入ることが目安だと言われた。

入学一週目に校内模擬テストが行われ、すぐさま結果が掲示された。二十一位に名前があつた。さすがに、このままでは志望校に遠く及ばない。特に、苦手の英語が悲惨な

成績だった。

英語という科目は、二、三か月の詰め込みでは力がつかない。中学、高校を通じ、なにしろ学習した時間が少な過ぎる。家業の手伝いに追われてきたせいもあるが、もともとどう取り組んでよいかわからないままで、いまだに好きになれない科目であった。

国語の方はたいしたこともせずかなりの得点が見込めるのだが、英語はいつも平均点に近い位置にいる。数学も、問題の傾向によってかなり乱高下した。

一回目の合否判定はDランクであった。

入試までの残りの期間は十か月である。逆算すると、英語四、数学三、残りの三で理科、社会、国語に取り組む、との一応の目安を決め、おおまかなスケジュール表をこしらえ、目の高さの壁に貼り付けた。こしらえた表を眺めていると、心なしか気持が落ち着き、先行き何とかかなりそうな気分になるから不思議だった。

国立文系コースのテキスト自体はそれほど難解ではないのだが、自分で準備した難関国立文系コース用のサブテキストの方は、かなり難航した。数学の問題一問を解くのに、一時間も二時間も要するのだから、テキストは殆ど進まない。英語も、単語の意味を調べるのに時間をとられ、全体が見通せない状態を脱し得ない。

「詰め込むのは、要領の悪い者のすることだ。自然に体全

体で会得して噛み砕いてきたものが、力となるんだよ。焦りや無理は禁物さ」

本館の二階にときどき遊びに行くと、下川と古田が文系のみで付き合ってくれるようになった。

二人とも、肩に力こぶを入れて頑張っている様子などなく、ベッドに寝そべったり、ラジオを聞いたりしていた。

下川など、寝そべっているというより、本当に軒をかいていた。

「入試だろ、たかが。たいてい、六割切りがボーダーだ。

六百点がそうだとすると、六百十点、いや六百五十点取れば済む。それを、志望者五百人の百番以内に入らないと駄目だ、などと考えるからきついんだ。つまり、自分が六百五十点取るにはどうしたらいいか、と考えてみれば案外楽でね、ことは考え方を変えるだけで見えてきたりする」

「例えば、国語が百四十点、数学が百三十点、社会が百四十点、理科が百四十点、英語が百点で六百五十点だろ。全部が二百点満点の場合で、こうだぜ。六割五分だ。だから、これより上を行けばいいんだ。理屈なんてない。一科目が不得手なら、他の科目で補い、総計でボーダーを越えればいい。五割のものもあれば、七割五分のものもある。それらを合計して六割と半分まで伸ばせたら、恐れるものなんてないよ」

「ものは考えようだ。どの科目も目一杯取ろうとするから、

くたびれちまうんだ。取れる科目で取ればいいのさ」

軒をかいている下川の鼻を振りながら、古田がこともな気に言う。

「それはそうなんだろうけど」

何となく分かった気分になり、生返事をして僕は戻ってくる。その気分で英語のテキストを開くのだが、一問を訳しているうちに夜が更けてしまう。

寮の毎日は校長が見回る。夕食後の八時から十時にかけて、寮内を歩く。まだ六十代半ばというから、精力的だ。ラジオを高音で鳴らしていると、いきなり踏み込まれる。

部屋に電気が点いていないと、ノックだ。

夕食が終わって一時間、つまり八時までは外出が可であるが、それ以降は学習の時間になっている。時間前までにみんな銭湯に出掛けたり、夜食の買い出しに出掛けたりするのであるが、数人の夜遊び常習者がいて、明け方近くにならないと戻ってこない。

校長は彼らを昼間呼び出し、理由を正したり、親元に連絡したりするので煙たがられている。それに耐えきれず、数人が寮を出たという。

「ちよっときてくれ」

校長がドアを開け、僕を呼んだ。

「これは君かね」

トイレの大水が流されていない。何事かと、何人かが部屋から出てきた。僕も何のことだか、分からない。

「今日で三日かな。見回ると、決まってこの状態だ。たままたまやってきた連中に聞くと、君が入寮するまではなかったと言う。君が水洗の使い方を知らないんじゃないかとね。実際、島には水洗はなかったな」

「ありません」と言うと、「知らない者がやるんだろうな」と僕を睨む。僕に聞かれても分かる訳がない。

「では確認しよう。水を流してみたまえ」

校長は自説を曲げようとしないうちに、僕を促す。「濡れ衣に決まっていますよ」と叫びたかったが、実際に水を流してみないことには納得しそうもないので、仕方なくコックを押した。汚物が流れ落ちるのを見て、校長は声高に「共同の場だ。ちゃんとみんなのことを考え、行動するんだぞ」と僕に対する嫌疑は晴らさないまま、大股で去った。校長の後ろ姿を見送りながら、「田舎者には、文化生活のイロハなど分かる訳がない」という考えが根にあったのだということが、段々分かってきた。

「やっぱりな。俺もそんなところだろうと思ってたんだ」

四、五人が、僕の耳の間近で声高に叫んだ。含み笑いの声も混じっている。

僕は部屋に戻った後も、屈辱に体を震わせていた。

D棟は私立文系コースの志望者で占められていた。

早稲田や慶應というより、東京六大学や関西の法学部、経済学部、商学部志望者が多い。私立は国立の数倍も授業料が高いのだが、比較的裕福な家庭が多いらしい。家が商売をしていたり、司法書士だの税理士だのという具合だ。

国立系に比べ、物腰や風貌が頼りない気に見えるのは、うちのせいかもしれない。家からの仕送りが結構あって、規則で縛られた寮内でも、時間を見ては繁華街に出て、ラーメンや菓子や果物などを買ってくる。果物などは、食堂では決してお目にかかれないものだ。西瓜の初物、葡萄などをぶら下げて帰ってくるが、相当値の張るものに違いない。彼らは、校長の巡回が終わる十時を過ぎると、D棟の仲の良い連中を呼び、彼らの溜まり場になっている東端の八号室に集まり、煙草を吸ったり、菓子を食ったりしながら、この学校の女子の話をしているらしい。

学校には女子寮がないので、通学が難しい女子は学校から十分ほどのところにまとまって建つアパートに借間しているとのことで、その子たちを呼び込んだり、反対に部屋に訪ねて行ったりしているとの話をいつもする。

僕の相部屋の沢村は、背が高くして色白で、憂いを帯びた目が女の気を惹き、持てる方の上位にいるらしく、一週間ほどに二日ほどは部屋を出た切り戻ってこなかった。それでいて、成績は悪くないのである。家が大きな商店であるらし

く、東京の大学を出たら家を継がされる約束らしいが、本人にはその気などまるでなくて、中央で一旗揚げるのさ、と嘯うそいていた。

沢村は、朝の七時半の開門を待つて部屋に滑り込んできたが、煙草と香水の匂いをいつも纏まとっていた。多分、女の下宿で眠ったのであるらしく、そのまま洗面をして朝食を摂り、授業に出て行った。

沢村も講師の説明によく質問を挟み、得意科目の英語では講師の和訳より、すらりとした訳を披露した。

沢村の志望は首都圏の難関私大で、政治家や法律家や文学者までを多く輩出している伝統校だった。

「伯父が東京にいて、弁護士をしている。俺も憧れてるんだ。親父も同じ大学だけど、田舎に引つ込んで百貨店主に甘んじている。俺の場合、そうはいかんのよ」

目標がしっかりしている。僕が哲学をやってみたくらいからと言ったときには、いきなり笑ひ飛ばされてしまった。

「何や、遊びに行くんか。よくも、そんな理由で周りが納得したな。ビジョンがないし、仕事はどうするんだ。教養を得るためか。えらい余裕やんか」

親や校長と同じことを言う。沢村にまでこんなことを言われるのかと、ショックだった。と言うより、僕は、それほど周囲に理解してもらえないことをしでかそうとしているのだろうかと思ふ暗澹たる気分になった。

「そのための猛勉強か。大変だよな。この遊びたい時期に、アルバイトをやり、めちやくちや根詰めてさ」

僕は四時間にわたる手術を経、さらに二度目の手術を経、身奥から感じるものを得たのだった。それは、仕事には直結するものではないのかも知れないが、説明のしようのないもので、その導きにより進んできた。しかし、親も、校長も、周囲も殆ど理解してくれる者はなかった。

この行こうとする方向へのこだわりは何なのだろう、と自分でも考え込むことがあった。単に大学の知名度だけを追っている訳ではない。ところが、文学部というところが、これから生活する上において、他学部よりも大きなメリットを有しているところではないというのだ。

司法試験だとか、会計士試験だのといった専門職業家のためのツールにもなり得ない。つまり職業を求めめるためには、決して条件が整えられているとは言いがたい。

しかし、僕に呼び掛けるのは文学部なのである。

僕は島の農家の長男として生まれ、物心ついたときから土に向き合って働くことだけを強いられた。狭いながらも田や畑があるのだから、放っておく訳にはいかない。それも、近辺の連中に勝る仕事をせねばならない。農家にとつて、作業が鈍いなどということは恥であると言われる。

頭髪を剃り上げている校長の頭が、窓の外の中庭の池の

水の光を受け照っている。

「一向に上がる気配がないではないか」

「今、遅れている英語を集中して攻めています。それと数学もですが」

「その割にはここにきてから、殆ど結果が出とらん。展望はあるのか」

七月の面談になると、二度の模試の結果を見てのかなり厳しい指摘だった。アルバイトの方も話題になった。

「殆ど寝てないでアルバイトだよな。島の高校についてがあつたんで、君のことを聞いてみた。去年の二期期は入院しとつたという。入試の心得を全く潰しとるじゃないか」

「大丈夫です。虫垂炎は完治しましたから。もともと切りねばならなかったのですが、薬で散らし延ばし延ばしにしてきたものですから、肝心のときに出してしまいました」

「そういう話だった。しかし、昔の担任は君の芯の問題の方を心配しとつたな。やる気と秘めた力はある。ところが基礎になるところがおざなりになっており、そのせいもあるうが、かなり向きになる傾向がある、とな」

「確かにあの頃は向きになり、しゃかりきになっていました。でも、この学校にきて、特待生連中の話を聞くことが出来、随分教えられました。しっかり積み重ねをやれば、恐れることはない。六割五分以上を目指せば勝負になるし、勝負になるためには時間が必要だと。時間は逃げはし

ないから、動揺せず、無闇に焦らぬことだ」と

「まあ、秋口ぐらいまで様子を見てもいいとは思えるのだが。しかし、と加えたいのは、芯の問題というこいつだ。

無事に秋を迎え、冬を迎えることが出来れば、特待生連中の言うとおりになるやもしれん。ところが、肝心の特待生連中にも同じことが言える。彼らは本来盤石の力を持っている。先の入試に落ちよう筈もない、県下で常にトップテンに名を売ってきたのにだ。何でこうなる、と驚いたのは彼らの高校の担任であり、下馬評にもめつたに上がらなかつた実際の合格者連中だ」

「下川や古田や近藤たちも落ちたのですね。全く他を寄せ付けない、彼らでも」

「ようわからんが、このレースには魔物が棲んでおつてな、常の上だから大丈夫だとは限らんのだ。君の話に戻すと、担任が言う芯の問題というところが引つ掛からんではない。この時期に言うのも何だが、何千という生徒を見てきた勘で言うと、自ら焦つて、無理だけはするなということだ」

校長は、剃り上げた頭に汗の玉を浮かべ、手元の資料は置いて、真つ直ぐに僕の目を見て言った。

「去年は夏の終わりに入院したのですが、今年はその失敗に学んで無茶はするまいと自分に言い聞かせています」

校長の面談を終え、僕は気持が萎えることなどなく、勇気を得たと感じた。

授業にも無理なくついて行けていたし、アルバイトの清掃もコツを掴んでいた。夕食後一時間の仮眠をとつて、計画どおりに英語、数学をこなし、朝が白みかけてくる五時にベッドに入り、七時に起きた。模試の成績にはまだ十分に表れていないが、英語は以前と違い、問題をかかなりのところまで読みこなせるという自信が芽生えていた。

僕自身の予定表には快調だというチェックを入れており、去年の担任にも経過を書き送つたりした。

母にも連絡を入れたら、高血圧と糖尿病のその後の具合はどうだ、という短い手紙がきた。考えてみれば検査も受けず、自覚症状もないので、「何とか折り合いをつけている」との返事を返した。母の手紙には、僕が親元を去つた今、下の弟が高校二年になり、僕が受験するという先鞭をつけたため、弟にも大学受験を思い止まらせる術がなくなつたことを悔やんでいる、という気配が読み取れた。

僕は家元からの仕送りを最小限に済ますため、特待生以外に二人だけ授業料が免除される給費生という制度に申し込んだ。要件は、一人は特待生に次ぐ成績を現にあげている者であり、学校がそれと認定した者で、特別に認定生と云つた。もう一人は、認定生に次ぐ者で、現段階ではまだ成果は見えないが、特待生や認定生に次ぐ結果を出そうという意欲のある者に与えられることになっている。

認定生の方は自ずと決まるので申し込みもなく決定され

るが、最後の給費生の方は、締め切り日の七月末日までに十数人が申し込んだという。選考結果が掲示される日に発表を見ると、十数人の中から僕が選ばれたのだった。

直ちに給費生二人が校長室に呼ばれ、激励を受けた。

常に特待生を脅かす順位にある琴尾明子はこの校のマドンナと言ってもよく、地元の医学部志望だった。理数科目にかけては、下川や古田を凌ぎ、東京大学医学部志望の近藤に迫っていた。家が内科医院であり、姉は現役で医学部に入ったという。色白でスマートな体型からは、いかにもという育ちの良さが醸し出され、校長室が一気に華やいだ。認定生は本人からの出願ではなく選考によるので、琴尾明子は幾分とまどった表情を見せながら、給費生という称号は重たいので辞退したいという返事を、微笑みを湛えた表情で述べ、深々と頭を下げ校長室を出て行った。

「よくあるんだ。彼女は、本校ではめったに見ることのない才媛というタイプだな。しっかりと意見を述べるよ」

校長も予測はしていたらしく、「特別な称号を受けると、精神的負担が増すという話をよく聞くんだ。この制度も改める時期なのかもしれない」と、出て行った琴尾明子の影を追う格好でしばらく見送った。

「じゃ、君はどうする」

「僕にはとても有り難い制度です。是非お認めくださるようお願いします」

「わかつとる。ただ、琴尾君も言っていたとおり、相応の結果が求められるんだ。たとえ結果が伴わなくとも追徴したりすることはないが、これから秋の本番に入って行く。余計な重圧を受けることになれば逆効果だ。先日話したとおり、気が逸り過ぎるということはないだろうな」

「今の調子で続けて行ければ、と考えます」

「給費生というのは、授業料を免除するということでもあり、期待値でもある。かと言って過度の重圧を受け、潰れてしまったら元も子もない。何とかして、京都大学の門を真つ直ぐに叩いてくれ」

校長はこれまでとはかなり違った言葉で僕に接してくれたが、文学部哲学分野のくだりは言わなかった。

この夏の終盤にきて、家からの負担がほぼないようにと計らった。もともと、母が最大の望みとする「日々の労働力になる」ということと、「島に居住する」ということは置いたままであるが。

偏差値が上がる気配がある。合格偏差値は七十であるが、最新の模試では六十八でまずまずの位置にあると、自分では可能性ありの方に賭けている。現役の去年は、入院でかなり消耗しながらも六十九まで行ったのだった、という経験もある。数値にはまだ表れていないのであるが、あの時期より間違いなく力を付けている筈である。

半年以上の期間が残っている。今のやり方を続け、積み上げて行くなら、近い内に七十越えは計算出来るとみた。

清掃のアルバイトを三人で丹念に行っており、成就の曉には結果が待っているというジンクスも心強かった。二時間半の作業が終わると夕食を軽く摂り、目覚ましをかけて一時間眠った。起きるとテキストに従い、英語、数学の課題に取り組んだ。気が付くと朝の光が射し始めており、もう一度目覚ましをかけて二時間眠った。

昨年発病した夏場を乗り切ると、現役生が力を発揮し始める秋の陣に突入することになる。

特待生の間で、下川の姿がときどき消えてしまうという噂が囁かれているのを耳にした。あまりはつきりしない話を繋いで考えると、学校から遠くない場所に新興宗教の支部があり、六月頃から通い始めたということらしい。学校を辞めたということではなく、授業が行われている時間帯に街の大通りでチラシを配り、白板を前に宗旨についての説明をしたりしている場合があるという。

古田と近藤の話では、下川は継母に育てられたのだそうで、日頃から自らの存在の問題を探るためということ、仏教書や聖書などを読み続けていたらしい。

「死者の書だとか、ビッグバン理論だのについて話し出したら、止まらない」

「朝三時に起き、学校の裏手にある東明寺の座禅会にも参加していたし、カトリック教会にも出入りしていた」

「科学館でプラネタリウムに見入ったり、いつも持ち歩いている手帳には短歌を書き付けている」

「彼の机には、学校の教科書一式はあるが、開いているところを見たことがない」

古田たちが交互に話してくれた。

「受験には飽き足りない、という意味もあるのかな」

「ないとは言えないが、よく言っていたように、托鉢僧に身を変え道を探り歩きたい、ということかもしれないな」

「彼の意識のうちには己の存在の問題から発し、争い、騙し合い、相手を殺戮しても止まない人間存在への疑心があるということらしい」

近藤が言うとき古田が、

「近藤にもこの大宇宙の成り立ちを科学的に解き明かそうという目的があつて、医学を辞め、理学に希望コースを変えたいとの思いがあるのだったな」

「下川の影響かも知れないが、この極めてレアな確率を思うと、宇宙誕生、生命誕生というのはどう説明したらいいのか。生命には人間だけでなく、巨大だったと言われる恐竜から、超ミクロの細菌類に至るまでを考えると、この世界はヤワな場所ではないと思えてね。これを考え始めると、足が地に着かないんだ」と言う。

古田も、「同じ関門に向かって走っている我々の図が、ピエロそのものに見え、吹き出したくなる。まして、実家の法律事務所の後継が自分の責務などと考えると、何をやってるんだと叫び出したくなる」と言うのであるから、特待生の連中も結構悩ましい問題を抱えているらしい。

であるから、下川が新たな宗教の何に呼応して通りに立ったりしているのか、古田たちにも気持が分らないではないと言う。

一方、学校側も特待生の動きには注意を怠らずにいるらしく、事務長らが下川の大通りでの説明の正面に立ち塞がり、聞いているらしい。

佐世保は基地の街であるから、市民の多数は播り鉢状の傾斜地に住み、佐世保駅周辺のデパートや病院や商店街にバスなどを利用して下ってくるという生活をしている。

しかし、佐世保湾一帯の平坦な地の広い部分は米軍の基地であり、米兵たちの住居があるが、彼らの区画の広さは日本人宅の及ぶところではない。普段乗り回している自動車からして、ばかでかいクライスラーだとかの大型車で、道路幅の半分以上を占拠しているのではないかと思えた。

佐世保の繁華街は、米国関係者の家族連れが中央を歩き、数少ない日本人が道の端を歩いている。よく見掛けるのは、達磨よろしく太った夫婦が手を繋ぎ、傍をスタイルのよい

娘が颯爽と風に髪を靡かせている姿だった。

僕たちが思うのは、中年の夫婦、特に女性の太り方のすさまじさで、身長が百七十センチだとすれば、ウエストは百五十センチをゆうに越すに違いないという姿だった。彼女の横に、ウエスト六十センチの細身の娘がステップを踏みながら歩いているので、そのアンバランスの妙に見入ってしまうことが多い。

基地には、ベトナム戦争の始まりとともに米兵が溢れ、艦船等が補給や修理などの名目で入港し始めたという。

休日になると、市の中央の公園などに「佐世保基地撤去」を求める旗が立ち並び、ハンドマイクでシュプレヒコールを繰り返しながら、基地近くの海軍橋を練り歩く姿が多く目に付くようになってきた。

「佐世保基地撤去」

「米軍艦船の寄港反対」

「ベトナム戦争反対」

といったスピーカーの音が、海軍橋を見下ろすことのできる進学予備校の下を頻繁に通って行った。

「今年は落葉が早いと聞くな」

清水が箒の手を休め、空を仰いだ。階段の中途である。緩くカーブしている階段の片側にはサクラ、モミジ、ケヤ

キといった高木が植えられており、もうサクラが葉を落とし始めている。モミジの紅葉には早い、乾いた秋の空気が漂い、高く澄んだ空からサクラの黄葉が身を震わせながら降ってくる。

「十月も、もう半ばだ。ちよつとセンチになるな」

「センチメンタルか。清水は教育学部心理学だもんな。わかるわかる」

川本が掃く手を休めずに言う。川本の手にはビニール袋があり、掃き寄せた葉を小まめに袋に入れていく。

「十月となれば、もう本番がそこという感じだなあ」

「考えようだな。俺の方は十一月、十二月と課題を順々にクリアして行くという考えに立つな」

「分かった、分かった。今の自分には、秋の時候が足音となり意味もなく迫ってくるもんでな」

僕は二人の話を十段ほど下で聞きながら、この季節には何かが移り行く、という思いを禁じ得ないでいる。清水の言うセンチとは中身が同じであるかどうか分らないが、この秋空の下で確かに何かが動き始めているのを感じた。

「今月の二千円で、俺は欲しかった時計を買うんだ。入学したら、好きな山を歩いて体を鍛えたい」

川本はしっかりと現実を見詰めている。

仮眠から起きたとき、何となく熱っぽく体が落ち着かな

い感じがした。足元がひどく頼りない。机のテキストに向かって見たものの頭の芯が重いので、洗面室で歯を磨き、顔を洗った。鏡に映る顔が心なしか青く見える。

部屋に戻り、テキストに向かったが、頭全体に膨満感があり、体に切れがない。切れがないというより、もの憂い気怠さが身内から湧いてくる。座っているだけでも辛いので、風邪でも引いたのかなと観念し、ベッドに戻った。

翌朝も、昼も調子が戻らないので、朝食も摂らず、初めて授業に出なかった。二日目、三日目も同じだった。

三日目に保険証を探し出し、予備校に最も近い内科を訪ねた。熱が三十八度で、風邪には違いないとの診断で、風邪薬を三日分もらったが、また三日後に来るようにとのことだった。

僕の胸の内に、去年のシーンが蘇った。腹部の方は当分過労などの無理は避けるようにと言われていたし、高血圧と糖尿病のことまでが思い出された。

部屋に戻り風邪薬を飲んで眠ろうとしたが、それまでにはなかった下腹部に重苦しいものを感じ、それがだんだん領分を広げつつあるのではないかと思え、目を閉じかけたが、眠れない。息苦しいのである。みぞおちの当たりが絞られ膨らんできた感じから始まり、箇所の特定出来ない痛みが表れ、広がってきた。熱があるというのに、冷たい汗が全身から湧き出、シャツやシーツを濡らす。

僕は去年の虫垂炎のことを思った。症状が似ている。もの憂い鈍い痛みから始まり、下腹部全体を覆っていくあの腹を押さえ付けてくる重苦しい痛みがある。

切除した虫垂炎の再発などある訳がないと、頭を整理しようとするのだが、整理の猶予を与えない鈍い痛みが広がり、眠るどころではない。「外科なのだ」と頭の隅の隅が叫び、そうに違いはないと思えたので、ようようベッドの頭に手を回し目覚ましを見ると十時を回っている。去年の経験から、個人病院ではなく総合病院を訪ねようと、居合わせた沢村に尋ねると、救急病院の方が良くはないかと言いつつたん部屋を出て行ったと思うと寮監と一緒に戻り、二人は頷き合い、救急車を呼ぶことにすると言った。

その間、僕は痛む腹を折り曲げ、手早くバッグに荷物を拵えた。少し迷ったが、英数理の参考書も入れた。

救急医は、正確には翌朝の専門の医師に診断を委ねるがと言いながら、虫垂炎の既往歴があるということから、憩室炎というものではないかと説明してくれた。すぐに急患用の病室に運ばれ、点滴が行われた。さすがに総合病院の処置は素早く、まず痛みをかなり和らげてくれた。

専門の担当医の診断では、かなりの過労の跡が見られることから、少し様子を見た上で手術が必要であるかどうかを判断するということだった。間を空けず点滴が行われ、睡眠剤が入れられているのか殆どの時間眠らされていた。

入院後も最初の模試の日には、参加しなければという思いに引かれながら、呼吸を整え意識を懸命に正し、待てよ、今は競争から外れて力を戻すときなのだと言いつき聞かせ、眠りに入った。十月の模試では、現役の連中が急激に力を伸ばし、これまでの上位者の名前も大幅に変わってきていた。八月頃までは、下川、古田、近藤、琴尾などが必ず県下一斉模試では最上位を独占し、全国の旺文社模試などでも上位者の中に食い込んでいたが、九月頃からは県下一斉模試でも最上位を現役に明け渡す状態で、旺文社模試などで彼らの誰かの名前をかるうじて目にするほどになった。であるから、今は、これまでゆとりをもつて臨んでいた下川たちも、ぎりぎりの勝負をしているに違いない。

僕の場合はなおさら、この時期の競争の外にいますということはどう捉えるべきか、苦しい思いに責められる。

検査や経過観察の結果、昨年の再度の手術のこともあるので、万全を期するという意味で開腹をするという方向が担当医グループの協議で決まったと説明がなされた。

「長期に亘りそうですか」

「殆ど問題がないとの前提でみて、通常の虫垂炎の手術あたりを想定すればいいでしょう」

まだ三十代だとみえる担当医は、唇に微笑みを湛えながら答えた。

僕は学校の佐藤事務員に、経過と今後のおおよその予定についての電話を入れ、君子叔母や、母にも同じ内容の電話をした。

「何でまた、こうなるのさ」

母はそう呻いたきり言葉を発しないので、三分も経たずに受話器を置いた。

手術室に入ると、執刀医、麻酔担当医、看護婦数名という陣容が待っていて、息の合った連携がなされているらしい中で、正味一時間もかからずに手術は終わった。

途中で臨床実習中らしい看護婦の卵たちが、僕の周囲を囲み、ノートを取ったりしていた。

手術後の担当医からの説明では、去年の手術のその後に変更はなく、必要最小限の施術を行ったというものだった。ただ、過労からではないかと思われる数値の乱れについて、内科的所見も併せて術後の経過をみたいので、約二週間の入院加療が必要となる、ということだった。それに、当分は安静を保つ必要があり、神経を詰めるほどの読書などは我慢してほしい、という要件が加えられた。

この説明を受けたとき、今年の受験もまた、無難には行かないのだろうかという冷たい予感が頭を掠めたのだった。

二週間後に寮に戻った。この間に大きく状況が変わったことがあった。下川が退学したという。

下川は新興宗教の支部に出入りしているうちに、三日、一週間と部屋に戻らない日が続いたらしい。その間には二度の模試を受けているが、いずれも偏差値七十を越え、成績は揺るがなかった。特待生の中では、最も安定しており、順位も殆ど落ちていない。

「こういう点数での評価を得ることに、以前から懐疑的だね。大疑団を抱えていたのだったが、ようやく晴れてきた。真理というものに近付きつつある。そうさ、騙されることなど絶対あつてはならない、というスタンスで臨んだよ。何度も矛盾を突いた。しかし、相手はたじろがない。われわれを包む宇宙の仕組みについてや、以前の宇宙の存在や、時間の流れの仕組みについて、考えられ得る限りの問答をした。そのうちに、真の我の姿を自分の手の平の上に見、幾重にも重なり合う次元の様を見たのだ。勿論、我の姿はクリアに見えている。我を司る彼の有り様もしっかり捉えた上でのことだ。よつて支部を出て、真理の道を探求する方向に全身全霊を賭けることにした。これは使命なのだ」

と古田と近藤に静かに語り、その足で校長に退学届けを出し、寮を引き払ったばかりだと言う。

古田も近藤もかなり動揺していた。受験を目の前にし、それも合格確実と言われながらの退学であるから、さすがの二人にも納得がいかないらしい。同じ文系の古田は、下川と最も深く付き合ってきたのであったから、シヨッ

クが大きいのだと見えた。

「引き留めるなんてヤワなことではないんだ。正気なんだ。一時的な熱に浮かされて、などという類ではない。彼は、彼の言うことを理解出来ない我々を、本気で憂えている。澄んだ静かな目で、見詰めるんだ。涙を溜めてね」

古田が僕に顛末を説明してくれた。近藤も「下川の言わんとするところが半ば分かるだけに、辛いよ」と唇を噛む。「肝心要の下川が、新興宗教なんぞに騙されよつたか」

校長は苦々し気に吐き捨て、この時期には毎年、一人、二人同じ傾向の者が出るんだ、とソファアに沈み込んだ。

米軍の艦船が入港したらしく、街には旗竿が揺れ、いくつものデモが海軍橋を渡って行く。基地の近くには機動隊が楯を連ね、デモの中で何か不穏な動きがあればすかさず掴み掛かろうと構えている。

「この立て札、どうもいけすかねえ。ここから奥は日本国ではありません、だとお」

「全く頭にくるよ。『日本人が入ることは、日本国の法律で禁止されています』だよ」

「日本国の法律で、というところが気にくわねえよな」
旗竿の先で立て札や基地内を指したりすると、若い機動隊員がデモの列に向かって掴み掛かる。

「お前ら日本人なんだろう。恥を知らんのか」

「この基地がよ、實際何をしてるか知らんのかよ」

小競り合いになる。機動隊の指揮車と思われる一段高い車から、「暴力は止めよ。決められたルートの外に出ると、直ちに検挙する」と大音量の怒声が飛ぶ。

繁華街を通り掛かると、水兵服の米兵たちが群をなし、広がり、明るいうちからビールを片手に、踊り跳ねている。周りには化粧の濃い若い女たちが、「ウェルカム、プリーズ」と甲高い声で水兵たちを呼び込もうとしている。片手に、二、三人の少女を一人で引き連れた水兵もいる。

商店街は普段の数倍も明るい照明に輝き、クリスマスソングを陽気に鳴らしている。いつも眠り込んだふうに見えるいた場所が、原色の街に一変した。

胸元が大きく開き、太股まで露わな女たちが、濃い化粧を塗り、強い香水の匂いをまき散らし、水兵の手を掴んで店の奥に消え、違った店からは水兵に抱き抱えられ、笑い合いながら出て来る者もいる。

商店街にも飲み屋街にも、テンポのよいリズムが生まれ、沸き立っている。狼狽なリズムのままに踊る者、雄叫びをあげる者、夜の空気の中で泳ぐ者、指笛を鳴らす者、ベンチの上で歌い、喚く者などで喧しい。

僕がアルバイトに復帰したのは、退院後一週間が経った

日だった。僕がいない間、清水と川本の二人で三人分の区域を受け持っていたらしいが、机の汚れもなく、ゴミ一つ零れない完璧な状態が保たれていた。

二人に不在を詫びると、同じ二時間と少しの時間で全てを分担したのだけれど、競争意識が働いてあまり苦にならなかつたとのことだった。それより、やり遂げればジंकウスにより近づくと感じるすらもつたと言う。ということでは、この段階で僕は、ジंकウスから洩れてしまったのだからかということを感じざるを得ない復帰となつた。

二時間半の作業を終え軽めの夕食を済ませ、以前からのスケジュールどおりにまず一時間の睡眠をとつた。起きるとすぐに英語に掛かり、少しの休憩を入れた後、数学に掛かつた。入院前は五時までを充てていたが、さすがに過度の無理を避けるようにとの医師の言葉が頭にあり、三時までで終えることにした。都合問題二問を削る、という計算になつた。が、不思議にひどい疲労感はなかつた。

神経が冴えていた。透明な箱の部屋に入り、今もまだ何本ものチューブに繋がれている自分を想像した。厳重に管理されているままの自分が、テキストに向かい合っている、そういう姿に違いなかつた。これから三か月の後には、これらのチューブを外し、透明な箱の中で管理された場所から出ねばならないのだ、という観念が頭を占めていた。今の状態が持続出来るのであれば問題は無いのだが、模試に

臨み、最後は本番の試験会場に臨まねばならない。偏差値は六十九で止まり、今一步である。それに、現役生が本物の力を付けてきた最新の偏差値は六十八に下降した。

いつの間にか、去年の試験本番の日のことを思い浮かべている自分に気付いている。あの試験場に座っているだけで目眩がし、脱力感に見舞われ、何とか粘らねばと精一杯奮闘している自分の姿に鼓動が高まり、冷たい汗にまみれ、ああこれは夢だったのか、と思い直す朝が続いた。

昼過ぎから、海軍橋のあたりを旗竿が足早に歩き始めた。長い列である。これまでだとせいぜい数えられるほどの旗竿であつたのが、終結した公園のあたりから切れ目が無いほどに延びる。シュプレヒコールの声も高く、機動隊の鈍色の楯の数も多い。指揮車が声高に威嚇の声を発している。あれが透明に管理された箱の外の世界なのだ、と部屋の窓の内から見下ろす。荒々しい言葉が飛び交うのであるが、楯の向こうではもつと激しい暴力が行われているらしい。食堂に置かれた新聞やテレビでは、ベトナムでの戦闘が長期化しそうな情勢であると、連日伝えている。

繁華街には、多くの水兵たちが群れ出て、佐世保以外からもやって来たのか、裸に近い女たちが米兵に肩を抱かれ、嬌声をあげているという。街が膨らみ、方向も分かつたはず揺れ、走り出したのかと思われる。

足元で、サイレンが鳴り出した。低く唸りながら、いつまでも鳴り止まない。真向かいの高台の一点に激しい炎が上がっている。

消防車や救急車が、寮の真下の道から何台も走り出て、国道で合流し、勢いを付け、炎に向かって駆けて行く。

考えてみれば、この街に来て最初に気付いたのは、火事の多さだった。播り鉢状の街であるから、たいいてい炎が寮の窓から望めるのだった。石油タンクに火が点いたとき火事は、一晩経っても消えず、深夜の街の家並みははつきり識別出来るほどに、激しく火を噴いたこともあった。

真向かいの炎は芯の部分に黒色を包み、赤や黄の火の手を上げている。「おう、派手やお」と他の棟の部屋からも声がする。「燃料置き場のあたりかもなあ」そこに何かあるのか僕には分からないが、みんなが騒ぎたてている。

サイレンの音が低く、高く唸る。不気味な具合に止む瞬間もある。が、すぐにまた唸りが始まり、街を舐め渡して行く。こみ上げてくる吐き気に似た思いを抱いたまま、目が離せない。炎の方角は、京都大学に通じている筈である。一際激しい炎が上がった。僕は何故か、あの炎の中に、火達磨になった下川がいるのではないかと思った。了